

22 唐以前における妊娠の認識について

吉岡 広 記

婦産科に関する最古の記述は、馬王堆出土の『胎産書』（紀元前三世紀頃）である。これは『素問』などの学体的系が完備される漢代以前のものであり、妊娠・出産に対する関心の深さ、当時の認識を示す貴重な資料である。唐以前の婦産科専書は、『漢書』芸文志に『婦人嬰兒方』十九巻と見えるほか、隋唐期の正史中の子部・医術類及び五行類に多数見られるが、いずれも佚書である。ただし、『徳貞常産経』（『医心方』所引、『日本見在書目録』に著録、以下『産経』と略す）、『徐之才逐月養胎方』（『諸病源候論』『千金方』所引、正史に未見、以下『逐月養胎方』と略す）、『子母秘録』（『三因方』所引、『宋史』芸文志に著録）、『時賢産経』（故宮博物院蔵）、『楊氏産乳集驗方』（『証類本草』『幼幼新書』所引、『唐書』芸文志に著録）、『経効産宝』（『証類本草』所引、『宋史』芸文志に著録）、『経効産宝』（『証類本草』所引、『宋史』芸文志に著録）

録）の六書は、その佚文を見ることが可能である。これらにより、唐以前の専書における妊娠の認識が理解される。

『胎産書』の内容は、妊娠の成立や胎児の成長過程、男女の生み分けなどであり、特に重要であるのは、『淮南子』精神訓にも見られる各月の胎児の成長過程に加え、妊婦の生活法を示した部分である。この内容は、本書を基礎とし、『産経』『逐月養胎方』に至って完成を見える。『産経』（『医心方』巻二十二・妊娠脈面月禁法第一）においては、『脈経』巻九・妊娠胎動血水分吐下腹痛証第二のはじめに見られる、各月ごとのつかさどる経脈を挙げ、その経脈への鍼灸施術の禁止を指示する部分を付加する。『逐月養胎方』（『千金方』巻二・養胎第三）に至っては、さらに各月に起こりうる症状とそれに対する処方の指示を追加する。また、『産経』には術的な内容が多数見られ（『医心方』巻二十四・占推子寿不寿法第二十三がその一例。各巻に多数散見される）、専書の一部は隋唐期の正史において五行類に分類されていることから考えると、婦産科専書は、妊娠の生理やその最中の養生と

いう「胎教」的視点と、妊娠の吉凶という「方術」的な視点からの認識を中心としていることが見いだされる。

一方、婦産科専書以外の医学書は、専書における妊娠の認識とは明らかに異なり、妊娠の診断、特に脈診がその中心となる。その最も早い記述は、後漢代の『素問』（陰陽別論第七、平人氣象論第十八、腹中論第四十）、『靈樞』（論疾診尺第七十四）、『金匱要略』（婦人妊娠病脈證并治第二十）に断片的ではあるが見られる。これらの内容は、不統一であるが、少なくとも後漢代には脈診が妊娠の確認方法として確立していたことを示すものである。それ以降、その成果をふまえつつ西晋の『脈経』に至ってその完成を見ることとなる。本書は巻九に婦人門を設け、冒頭の平妊娠分別男女将産諸証第一において、『素問』などの経文を引用し（ただし『素問』腹中論第四十を欠く）、その補足をするとともに、妊娠の有無だけにとどまらず、胎児の男女の弁別、双子であるか否かなどの種々の新しい脈診方法を挙げており、その大幅な展開が見られる。これらより、医学書における妊娠の認識は、妊娠の診断という「候胎」的視点からの認識を中心とし

ていることが見いだされる。

以上より、妊娠の認識には、『胎産書』を基礎としつつ『産経』『逐月養胎方』にて完備された逐月養胎法を主体とする「胎教」と、妊娠の吉凶を占う「方術」とを基礎とする婦産科専書系統の認識と、漢代より起り『脈経』に至って完成した脈診を軸とする「候胎」を基礎におく医学書系統の認識の、二つの流れが見いだされる。隋唐期に至り、国家の安定により生じた医学の変化は、妊娠の認識においても同様に起こることとなる。これら二系統は、その成果の延長線上に、医学全書において包括されることにより、その進展を見る。

（日本鍼灸研究会）